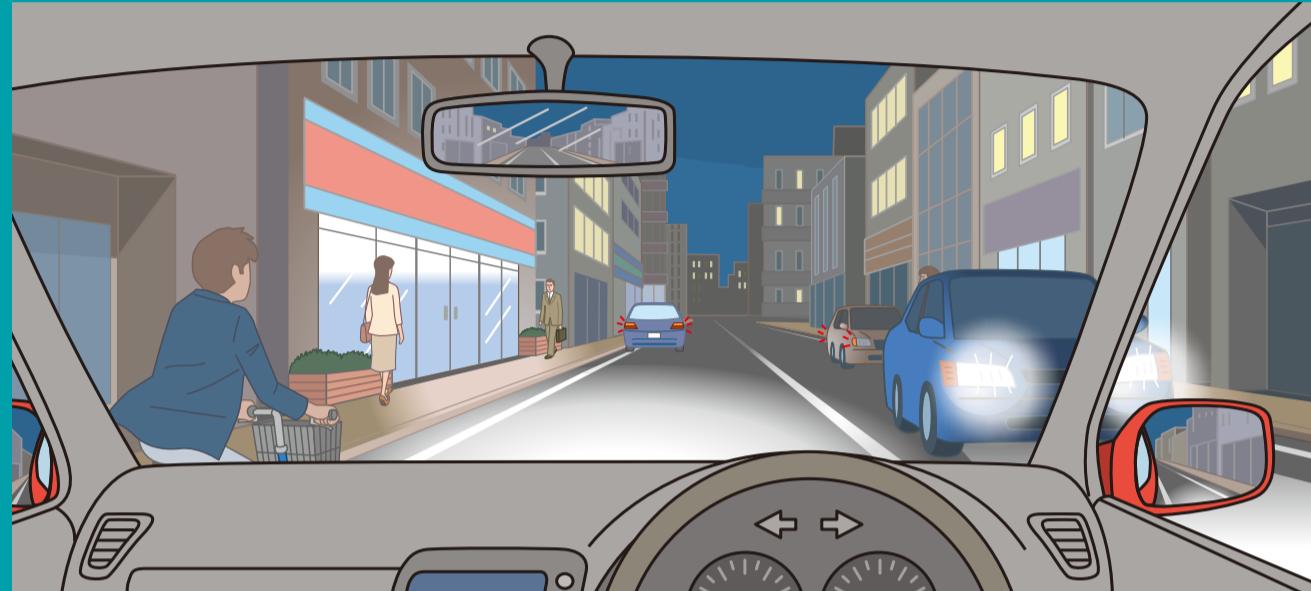




危険予測トレーニング

第95回 夜間、店舗の前で対向車とすれ違う時（四輪車編）

あなたは夜間、片側1車線の道路で対向車とすれ違うところです。左側には営業中の店舗があります。安全に走行するためには、どのようなことを予測する必要があります？



活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2. 「交通場面のイラスト」を見ながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト(カラー・A4版)」は下記SJホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード(無料)できます。

【使用上の注意】
 ● 営利目的での利用はおやめください。
 ● 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
 ● その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。
 本田技研工業(株) 安全運転普及本部
 TEL: 03(5412)1736 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

© 本田技研工業(株)

SJ クイズ ?

歩行者編

Q1

「夕暮れ時」や「たそがれ時」と呼ばれる薄暮時間帯^{※1}に発生した交通事故(2019~2023年の合計)を月別にみると、最も多いのは何月でしょう？

- ①10月 ②11月 ③12月

※1 日の入り時刻の前後1時間。

Q2

単路^{※2}において歩行者が道路横断中に死亡した事故(2013~2023年の合計)では、歩行者の右側よりも左側から進行してくる車両と衝突することが多くなっています。夜間に限ると、その割合は何%でしょう？

- ①約60% ②約65% ③約70%

※2 交差点、交差点付近、踏切等を除く道路形状。

Q3

2024年の歩行中(第1・第2当事者^{※3})の交通事故死者数を法令違反別にみると、最も多い違反は次のうちどれでしょう？

- ①信号無視 ②横断歩道外の横断 ③走行車両の直前後の横断

※3 第1当事者は交通事故の当事者のうち、過失が最も重い者または過失が同程度の場合は被害が最も軽い者。第2当事者は過失がより軽いか、過失が同程度の場合は被害がより大きいほうの当事者。



「解答」はP7下、「解説」は下記SJホームページでご覧いただけます。
<https://global.honda/jp/safetyinfo/sj/>

Safety Japan Action 2025 秋

～歩行中のお年寄りをまもれ！～

Hondaでは9月15日～10月3日にかけて、秋の交通安全運動に連動して「Safety Japan Action(セーフティジャパンアクション)2025 秋」を開催。Hondaの二輪・四輪の販売店や関連会社、各事業所を発信拠点とし、Hondaグループ一体となって、すべての交通参加者へ向けて展開してまいります。この秋は「歩行中のお年寄りをまもれ！」をテーマに、運転者に対して「漫然運転未然防止」に重点を置いて啓発しています。できるニヤンとお笑いタレント・ねづっちさんが登場するスペシャルサイトを開設し、抽選で当たるプレゼントも用意しています。下のQRコードからアクセスしてください。多くの皆さまのご参加お待ちしています。



期間中は交通安全ぬりえ
キャンペーンを実施



スペシャルサイトへ
アクセス▶



SJ 編集部だより

～交通事故死者ゼロをめざして～

今号のP4で紹介した桔梗ヶ原病院は、医療機関でありながら安全運転教育に力を入れている。病気で入院した患者が退院し、運転を再開した後、交通事故を起こさないようにするためだ。

Hondaは動画で再現した交通場面のケーススタディを通じて、「交通センス=危険予測能力」を身につけるためのトレーニング(KYT)をホームページで連載している(交通場面は2025年8月末現在88シーン)。リハビリテーション向けのSナビは多くの病院に導入されているが、これに加えKYTを取り入れるケースは珍しい。KYTを行う以前に比べ、患者はSナビで運転する際、いろいろな箇所に視線を向けたり、危険を感じる場面で止まるようになったという。時間をか

けてKYTに取り組むことが、運転中に危険箇所を見つけようという習慣づけになっているようだ。

桔梗ヶ原病院では、Sナビで安全運転していることが確認できると、患者は自動車教習所での実車評価へ進む。実車を運転して、教習指導員から課題を指摘されることもある。そのような患者には、運転支援チームの皆さんのが自分で原因を考え行動を修正できるように導いている。適切なアドバイスを行うため、皆さんも自動車教習所で定期的に教習を受講するなど、安全運転に対する理解を深める努力を欠かさない。安全運転を身につけた上で患者を交通社会に送り出したいという熱意が、皆さんのお話から伝わってきた。